

資料

重度聴覚障害幼児における家庭での絵本読み活動の特徴

— 絵本の内容に対する興味の違いによる検討 —

三枝 里江*・鄭 仁豪**

本研究は、聴覚障害幼児が日常的に読んでいる絵本の内容を分類し、その違いから、家庭での絵本読み活動、絵本を読ませる目的、絵本を読ませる際の工夫点について、健聴幼児との比較を通して検討した。質問紙調査の結果、聴覚障害幼児の保護者76名、健聴幼児の保護者91名から回答が得られた。対象幼児は「全体群」と「部分群」に分けられた。家庭での絵本読み活動においては、聴覚障害幼児は、「全体群」、つまり興味の発達が進み、本全体として物語を読んでいる群では、聴覚障害児が物語を読むことと、家庭での読み聞かせとの間には関連性が高いことが考えられた。絵本を読ませる目的においては、「全体群」も「部分群」も、年齢の進行に伴い、基本的には『興味・関心』が中心で、それに『知識・理解』が加わることが考えられた。絵本を読ませる際の工夫点では、「絵本の読み聞かせ方」の小カテゴリーにある「やり取りや確認をしながら読む」は、聴覚障害児も健聴幼児も、「全体群」では、すべての年齢に共通して挙げられており、今後は読み聞かせの方の検討の必要性が示唆された。

キー・ワード：聴覚障害幼児 家庭での絵本読み活動 読み聞かせ 絵本の内容

I. 問題の所在と目的

絵本とは、絵のみ、または、絵と文字を組み合わせて作られており（今井, 1991; 佐々木, 1980）、絵と文字が互いに足りない部分を補い、相互に助け合って情報を伝達している（生田, 2013）。読みとは、文字というシンボルで書かれたテキストから意味のある情報を引き出す活動であり、そのプロセスにおいては、認知的、言語的処理が行われている（鄭, 1996）。このことから、絵本読みとは、文字と絵というシンボルから意味のある情報を引き出す活動といえるであろう。

幼児期の絵本読みは、家庭で読書環境の影響が大きく（秋田・無藤, 1992; 奈良女子大学文学

部附属幼稚園幼年教育研究会編, 1986; Ortiz & Arnold, 2001; Roberts & Burchinal, 2005; 横山・上野・木村・原田, 2007）、読み聞かせや図書館・本屋に連れて行くといった親の活動や、親が読書をしているところを見せるといった行動が、幼児の絵本読みに影響を与えている（秋田・無藤, 1996; 横山ら, 2007）。このことから、絵本読み活動とは、幼児に絵本を読ませるために、働きかける活動といえるであろう。

家庭での絵本読み活動においては、読み聞かせが言語発達に影響を与えること（Bus & Pellegrini, 1995）、その時期の読書経験や読み聞かせの経験が、後の読書量にも影響を及ぼすこと（国立青少年教育振興機構, 2013; 立田, 2015）、中でも、特に物語絵本を読むことが、後の文章理解力や語彙力の向上に与える影響が大きいことが示唆されている（上田・猪原・塩

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科

** 筑波大学人間系

屋・小山内, 2017; Mol & Bus, 2011; Senechal, 2014)。しかしながら、絵本読み活動が、幼児が日常的に好んで読んでいる絵本にどのような影響を及ぼすのかについての検討はなされていない。そのため、幼児期によく読んでいる絵本の特徴から、家庭での絵本読み活動を検討することは重要であると考える。

幼児の絵本の内容に対する興味においては、「1 ページごとに1 場面を構成し、ある意味をあらわしているもの」から「絵本全体が1 つの話の筋を追ってできているもの」へと、段階を経て、発達することが明らかにされており、絵本の内容に対する興味を通して、発達の特徴が検討されている(村石, 1959)。そのため、幼児期に好み読んでいる絵本の内容の興味の差異から、家庭での絵本読み活動を検討することは、重要であると考える。

聴覚障害幼児の絵本読み活動においては、保護者と一緒に絵本を読む頻度と言語発達に関連がみられること(Lederberg & Beal-Alvarez, 2011)、読み聞かせが初期の読みの発達を促すこと(Aram & Mayafit, 2006; Easterbrooks & Stephenson, 2006; Spencer & Marschark, 2010; Stobart & Alant E, 2008)が報告されている。しかしながら、これらの研究は、文献的な研究や、事例的な検討に留まり、聴覚障害幼児の絵本読み活動に十分な情報は得られていない。

聴覚障害幼児の絵本に関する研究においては、絵に動きがある絵本や経験に結びつきやすい絵本(陳・茂木・鄭, 2013; 坂本, 1997)、つまり、見てわかりやすい絵本を好む傾向であること、海外の研究においては、物語絵本よりも、操作的な遊びの絵本に興味があることが報告されており(Kadervek & Pakulski, 2007)、聴覚障害幼児が、物語を読むことへの困難さが想定され、聴覚障害幼児が物語を読むためには、家庭において、様々な工夫が必要であると考える。

重度聴覚障害幼児においては、聴覚や音声からの情報の獲得に制約を受けること(鄭, 2004)から、健聴児と比べると周りと円滑なコミュニケーションが取りにくい現状があり、絵

本の読み聞かせのような幼児期から絵本を活用した経験に制約が生じることや(Spencer & Gutfreund, 1990; Swanwich & Watson, 2007)、幼児期に行われる絵本などを用いたやり取りを通じたコミュニケーション経験の不足が報告されており(斎藤, 2008)、家庭での絵本読み活動には、困難が想定される。しかしながら、聴覚障害幼児がよく読む絵本の内容と家庭での絵本読み活動について、検討は行われていない。

そこで、本研究では、聴覚障害幼児が日常的によく読んでいる絵本の内容を分析し、絵本の内容に対する興味の違いによって、家庭での絵本読み活動、絵本を読ませる目的、絵本を読ませる際の工夫点について、健聴幼児との比較を通して、その特徴を検討することを目的とする。

II. 方法

1. 調査協力者

調査協力者の選定にあたっては、聴覚障害幼児においては知人を介して、学校長に依頼し、了解が得られた全国の特別支援学校(聴覚障害)のうち、23校の幼稚部に在籍する幼児の保護者を対象とした。なお、調査対象の聴覚障害幼児は、聴力レベルが最重度(WHOの分類で81dBHL以上)、かつ他の障害を併せ持たない幼児を対象とした。健聴幼児においては、知人を介して、あるいは直接園長に依頼し、了解が得られた関東・東海・東北地域所在の幼稚園、保育園、認定こども園の3施設に在籍する幼児の保護者を対象とした。

2. 手続き

事前に各校の学校長に調査の趣旨を説明し、許可を得た上で、学校長を経由し、保護者に質問紙を配布し、学校経由、返信用封筒で郵送、または訪問によって回収した。調査期間は、2018年7月末～2019年2月上旬であった。

3. 調査内容

先行研究(秋田ら, 1996; 横山ら, 2007)を参考に質問項目の原案を作成した。質問項目の修正、および内容の妥当性については、特別支援学校(聴覚障害)幼稚部の教員とともに、質問

Table 1 質問項目

1. よく読んだ絵本
これまでに読んだ絵本の中から、よく読んだ順に5冊選び、そのタイトルの記述を求めた。
2. 幼児の絵本読み
①1日あたりの読書時間 (1~10分-1時間以上, 1点-5点)
②1週間あたりの読書冊数 (0冊-11冊以上, 1点-5点)
③幼児の絵本好意度 (とても好き-まったく好きではない, 5点-1点)
3. 親の絵本読み活動
④読み聞かせの頻度 (毎日-しない, 5点-1点)
⑤1日あたりの読み聞かせ時間 (1~10分-1時間以上, 1点-5点)
⑥親の読書好意度 (とても好き-まったく好きではない, 5点-1点)
⑦絵本の蔵書数 (1~5冊-100冊以上, 1点-7点)
⑧図書館、本屋に連れて行く頻度 (1週間以上-ない, 7点-1点)
4. 絵本を読ませる目的 (8つの選択肢の中から重要度が高い順に2つ選択)
想像力を豊かにさせる、絵本の楽しさを知ってもらう、絵本を通して親子のふれあいをする、興味や関心を広げる、ことばを増やす、物事を深く考えるきっかけをつくる、集中力をつけさせる、知識を身に付ける
5. 絵本を読ませる際の工夫 (自由記述)

紙の作成を行った。具体的な質問項目の内容を Table 1 に示した。

4. 分析の観点

(1) 絵本の分類

対象者への質問項目 (Table 1) のうち、「1. よく読んだ絵本」への回答の中で1番目に記述された絵本のタイトルを分析の対象とした。村石 (1959) の絵本の内容に対する興味の発達を参考に、絵本を「絵本全体が1つの話の筋を追ってできているもの」(以下、全体)、「2~3ページごとに話がまとまっているもの」(以下、2~3ページごと)、「1ページごとに1場面を構成し、ある意味をあらわしているもの」(以下、1ページごと)に分類した。分類にあたっては、筆者が図書館で、その絵本を読み、内容を確認するため、最終的に国際子ども図書館に蔵書されていない絵本、タイトル名が未記載の絵本は、分類の対象から除外した。なお、分類の妥当性にあたっては、筆者を含めた大学院生3名がそれぞれ分類を行い、一致率を求めたところ70.0%であった。一致しなかった絵本を3名で協議し、分類の観点(繰り返しの有無、起

承転結等)を検討し、その観点をもとに筆者一人で分類を行った。

(2) 家庭での絵本読み活動

幼児の絵本読みと親の絵本読み活動の2つを設定した。Table 1の2、3に示した①~⑥においては5段階評定、⑦⑧においては7つの選択肢からあてはまる項目1つを選択するように求めた。①②⑤は1点~5点、③④⑥は5点~1点、⑦は1~7点、⑧は7~1点、それぞれ配し得点化した。Kolmogorov-Smirnov 検定により、正規性がみとめられなかったため、中央値と四分位偏差を算出し、分析にはノンパラメトリック検定 (Mann-Whitney のU検定、Kruskal-Wallis 検定) を用いた。なお、記載漏れがあった場合は無回答として扱い、この項目の集計、分析から除外した。

(3) 絵本を読ませる目的

本研究では、絵本を読ませる目的の特徴を検討するにあたり、1番目に選んだ回答を対象とした。8つの選択肢を2つのカテゴリーに分類し (Table 2)、回答割合からその特徴を検討した。なお、カテゴリーの分類の妥当性にあつ

Table 2 絵本を読ませる目的の分類

カテゴリー	選択肢
興味・関心	想像力を豊かにさせる
	絵本の楽しさを知ってもらう
	絵本を通して親子のふれあいをする
	興味や関心を広げる
知識・理解	ことばを増やす
	物事を深く考えるきっかけをつくる
	集中力をつけさせる
	知識を身に付ける

ては、筆者を含めた大学院生3名で合意決定した。

(4) 絵本を読ませる際の工夫点

自由記述で回答を求めた回答は、意味の類似性に基づいてカテゴリー化し、カテゴリーの件数からその特徴を検討した。なお、分類の妥当性を確保するために筆者を含めた大学院生3名によって、合意決定した。なお、工夫点に関する以下の本文においては、『 』は、大カテゴリー、「 」は、中カテゴリー、〔 〕は小カテゴリーを示す。

5. 倫理的配慮

本研究は、筆者が在籍する大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

Ⅲ. 結果

1. 回収率

聴覚障害幼児においては、配布数298部に対し、183部の回収(回収率61.4%)が得られた。183名の回答のうち、聴力レベルが81dBHL以下の回答は分析の対象から除外した。そのため、聴覚障害幼児の対象者は103名であった。健聴幼児においては、配布数455部に対し、149部の回収(回収率32.7%)が得られた。

2. 幼児が読んでいる絵本の特徴

各対象児における「分析の対象となった絵本」が、「全体」、「2～3ページごと」、「1ページごと」のいずれであるのかを判断し、その対象児を、各興味の発達段階にある幼児として群

分けした。なお、聴覚障害幼児22名、健聴幼児55名が絵本のタイトルの記述がみられない等の理由により対象から除外された。本研究では、「1ページごと」の対象が少なかったため、「全体」と「2～3ページごと」を調査の対象とし、全体を「全体群」、「2～3ページごと」を「部分群」とした。対象児は、聴覚障害幼児においては、「全体群」は、3歳児15名(60.0%)、4歳児13名(57.0%)、5歳児17名(61.0%)であった。「部分群」は、3歳児10名(40.0%)、4歳児10名(43.0%)、5歳児11名(39.0%)であった。他方、健聴幼児においては、「全体群」は、3歳児20名(66.7%)、4歳児19名(70.0%)、5歳児28名(82.0%)であった。「部分群」は、3歳児10名(33.3%)、4歳児8名(30.0%)、5歳児6名(18.0%)であった。「全体群」においては、聴覚障害幼児は、すべての年齢において、その割合が60%程度に留まっているものの、健聴幼児は、年齢の進行に伴い、その割合が上昇していた(Table 3)。

3. 家庭での絵本読み活動

家庭での絵本読み活動の全体的な傾向を検討するために、各質問項目を得点化し、中央値と四分位偏差を算出した(Table 4)。読み聞かせ頻度の中央値(四分位偏差)において、聴覚障害幼児では、3歳児の「全体群」は4.0(0.50)、「部分群」は4.0(1.00)であった。5歳児の「全体群」は3.0(1.00)、「部分群」は2.0(0.50)であり、年齢の進行に伴い、低くなる傾向が示さ

Table 3 幼児が読んでいる絵本の特徴

対象児	年齢	全体群		部分群	合計
		全体	2～3 ページごと		
聴覚障害幼児	3歳児	15 (60.0)	10 (40.0)		25 (100)
	4歳児	13 (57.0)	10 (43.0)		23 (100)
	5歳児	17 (61.0)	11 (39.0)		28 (100)
健聴幼児	3歳児	20 (66.7)	10 (33.3)		30 (100)
	4歳児	19 (70.0)	8 (30.0)		27 (100)
	5歳児	28 (82.0)	6 (18.0)		34 (100)

数字は人数 (%)

Table 4 幼児の絵本読み活動に関する得点

		幼児の絵本を読み活動			親の読書活動					
		読書時間	読書冊数	幼児の絵本 好意度	読み聞かせ 頻度	読み聞かせ 時間	親の読書 好意度	蔵書数	図書館等へ 行く頻度	
聴覚障害幼児	3歳児	全体群	2.0 (1.00)	3.0 (1.00)	5.0 (0.50)	4.0 (0.50)	2.0 (1.00)	4.0 (0.50)	5.0 (1.00)	4.0 (1.00)
		部分群	1.0 (0.63)	3.0 (0.25)	4.0 (0.75)	4.0 (1.00)	1.0 (0.63)	3.5 (0.50)	5.0 (1.00)	3.5 (0.63)
	4歳児	全体群	1.0 (1.50)	3.0 (1.00)	4.0 (1.00)	4.0 (1.25)	2.0 (0.75)	5.0 (1.25)	4.0 (1.75)	5.0 (1.25)
		部分群	1.0 (0.63)	3.0 (0.50)	4.0 (0.50)	3.0 (0.63)	1.0 (0.63)	4.0 (1.00)*	4.5 (1.50)	4.0 (1.13)
	5歳児	全体群	2.0 (0.50)	3.0 (1.00)	4.0 (0.75)	3.0 (1.00)	2.0 (1.00)	4.0 (0.75)	4.0 (1.00)	5.0 (0.50)
		部分群	1.0 (0.50)	3.0 (0.50)	4.0 (1.00)	2.0 (0.50)	1.0 (0.50)*	4.0 (1.50)	3.0 (0.50)*	4.0 (0.50)
健聴幼児	3歳児	全体群	1.0 (0.88)	3.0 (0.50)	4.0 (0.50)	3.5 (0.50)	1.5 (0.50)	4.0 (0.50)	4.5 (1.00)	4.0 (1.00)
		部分群	1.0 (0.50)	2.0 (0.50)	4.0 (0.63)	3.5 (0.63)	2.0 (0.50)	4.0 (0.88)	3.5 (1.00)	5.0 (0.50)
	4歳児	全体群	1.0 (0.50)	3.0 (0.63)	4.0 (0.63)	3.0 (0.50)	1.0 (0.50)	4.0 (0.50)	5.0 (1.13)	4.0 (1.00)
		部分群	2.0 (0.50)	3.0 (0.50)	4.0 (0.38)	3.5 (0.88)	2.0 (1.00)	4.0 (0.88)	4.0 (0.88)	4.0 (0.50)
	5歳児	全体群	1.0 (0.50)	2.5 (0.87)	4.0 (0.50)	4.0 (1.00)	1.5 (0.50)	5.0 (1.00)	4.0 (1.00)	4.0 (0.75)
		部分群	1.5 (1.00)	2.0 (0.75)	4.0 (1.00)	4.0 (1.13)	2.0 (0.63)	3.0 (1.13)	5.0 (0.75)	4.5 (0.63)

中央値 (四分位偏差)
Mann-Whitney U検定 * $p < .05$

れた。他方、健聴幼児では、3歳児の「全体群」は3.5 (0.50)、「部分群」は3.5 (0.63)であった。5歳児の「全体群」は4.0 (1.00)、「部分群」は4.0 (1.13)であり、「全体群」の4歳児において3.0 (0.50)がみられるものの、年齢の進行に伴い、高くなるとともにばらつきも大きくなる傾向が示された。読み聞かせ時間においては、聴覚障害幼児では、すべての年齢で、「全体群」は、中央値が2.0 (四分位偏差は3歳児1.00、4歳児0.75、5歳児1.00)、「部分群」では、1.0 (四分位偏差は3歳児0.63、4歳児0.63、5歳児0.50)であり、「部分群」に比して、「全体群」の方

が高い傾向が示された。他方、健聴幼児では、「全体群」の3歳児は1.5 (0.50)、4歳児は1.0 (0.50)、5歳児は1.5 (0.50)、「部分群」は、すべての年齢で、2.0 (四分位偏差は3歳児0.50、4歳児1.00、5歳児0.63)であり、「全体群」に比して「部分群」の方が高い傾向が示された。

全体群、部分群間の質問項目の得点の差を年齢ごとに検討するためにMann-WhitneyのU検定を行った (Table 4)。その結果、聴覚障害幼児の4歳児において、親の読書好意度の項目で、「全体群」は、「部分群」に比べて、有意に得点が高かった ($U = 30.0, p < .05$)。聴覚障害幼児

Table 5 絵本を読ませる目的

	年齢	絵本の内容	興味・関心	知識・理解	合計
聴覚障害幼児	3歳児	全体群	11 (73.3)	4 (26.7)	15 (100)
		部分群	7 (70.0)	3 (10.0)	10 (100)
	4歳児	全体群	9 (69.2)	4 (30.8)	13 (100)
		部分群	9 (90.0)	1 (10.0)	10 (100)
	5歳児	全体群	11 (64.7)	6 (35.3)	17 (100)
		部分群	9 (81.8)	2 (18.2)	11 (100)
健聴幼児	3歳児	全体群	18 (90.0)	2 (10.0)	20 (100)
		部分群	10 (100)	0 (0.00)	10 (100)
	4歳児	全体群	13 (72.2)	5 (27.8)	18 (100)
		部分群	7 (87.5)	1 (12.5)	8 (100)
	5歳児	全体群	22 (81.5)	5 (18.5)	27 (100)
		部分群	5 (83.3)	1 (16.7)	6 (100)

数字は回答数 (%)

の5歳児において、読み聞かせ時間の項目で、「全体群」は、「部分群」に比べて、有意に得点が高かった ($U = 50.5, p < .05$)。蔵書数の項目で、「全体群」は、「部分群」に比べて、有意に得点が高かった ($U = 43.0, p < .05$)。他方、健聴幼児においては、有意差はみられなかった。障害の有無および、年齢による家庭での絵本読み活動の違いを検査するために、Kruskal-Wallis検定を行ったところ、有意差はみられなかった。

4. 絵本を読ませる目的について

絵本を読ませる目的の特徴を検討するにあたり、8つの選択肢は、『興味・関心』と『知識・理解』の2つのカテゴリーに分類された (Table 5)。

聴覚障害幼児においては、「全体群」も「部分群」も、すべての年齢で、『興味・関心』の回答割合が60%以上を占めていた。「全体群」では、『知識・理解』の回答割合は、3歳児26.3%、4歳児30.8%、5歳児35.3%と年齢の進行に伴い、その割合が上昇していた。他方、健聴幼児においては、「全体群」も「部分群」も、すべての年齢で、『興味・関心』の回答割合が70%以上を占めていた。

5. 絵本を読ませる際の工夫点について

絵本を読ませる際の工夫点について、検討す

るために、自由記述によって得られた回答は、意味的類似性に基づいて、『絵本の選び方』、『絵本の読み聞かせ方』、『絵本を読ませるための働きかけ』の3つの大カテゴリーに分類された。絵本を読ませる際の工夫点の特徴を検査するために大カテゴリーの合計件数を算出した (Table 6)。聴覚障害幼児において、合計件数が多かった項目は、3、4歳児は、絵本の内容の違いに関わらず、『絵本の読み聞かせ方』、5歳児では、「全体群」は、『絵本の読み聞かせ方』、「部分群」は、『絵本の選び方』であった。他方、健聴幼児においては、3、4歳児は、『絵本の読み聞かせ方』と『働きかけ』の合計件数が同程度であり、5歳児では、「全体群」は、『絵本の読み聞かせ方』、「部分群」は、『働きかけ』であった。絵本を読ませる際の工夫点の詳細を検査するために小カテゴリー件数の結果をTable 7に示した。聴覚障害幼児および健聴幼児の3、4歳児において、合計件数が多かった『読み聞かせ方』においては、小カテゴリー〔やり取りや確認をしながら読む〕では、すべての年齢段階の「全体群」は、聴覚障害幼児 (3歳児2件、4歳児4件、5歳児3件)、健聴幼児 (3歳児2件、4歳児1件、5歳児3件) であり、回答がみられた。小

重度聴覚障害幼児における家庭での絵本読み活動の特徴

Table 6 絵本を読ませる際の工夫点 (大カテゴリーの件数)

	年齢	群別	絵本の選び方	読み聞かせ方	働きかけ	合計
聴覚障害幼児	3歳児	全体群	3	16 (3)	5	24
		部分群	5	7 (1)	2	14
	4歳児	全体群	4	14 (4)	5	23
		部分群	1	8 (3)	4	13
	5歳児	全体群	5	7 (2)	4	16
		部分群	9	5 (1)	4	18
健聴幼児	3歳児	全体群	4	11 (0)	10	25
		部分群	1	6 (0)	6	13
	4歳児	全体群	3	6 (0)	8	17
		部分群	0	4 (1)	4	8
	5歳児	全体群	7	15 (0)	8	30
		部分群	0	2 (0)	4	6

読み聞かせ方の () 内の数字は、それぞれ、中カテゴリー「手段」の件数

Table 7 絵本を読ませるための工夫点の詳細 (小カテゴリー件数)

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	全体群					部分群					合計		
			聴覚障害幼児			健聴児		聴覚障害幼児			健聴児				
			3歳児	4歳児	5歳児	3歳児	4歳児	5歳児	3歳児	4歳児	5歳児	3歳児	4歳児	5歳児	
絵本の選び方	子供の興味	子供に選ばせる		1	1	2	2	3	1						10
		子供が興味あるものを選ぶ	2	1	2	1		3	1	1	2				12
	絵本の内容や種類	色がきれいなもの			1										1
		絵が多いもの		1							2				3
		文字が少ないもの									1				1
		短い内容のもの								1	1				2
		わかりやすい内容のもの									1	1	1		2
		動きがあるもの									1				1
		成長に合わせて			1										1
		シリーズもの					1		1						2
読み聞かせがしやすいもの									1				1		
季節や生活、学校で話題のもの	1					1		1		2			5		
絵本の機能性	閉じにくい本			1										1	
	抱っこして読む							1			1			2	
読む環境	向かい合って読む		1							1	1			3	
	おなじ方向を向いて読む		1											1	
	静かな場所で読む				1			1				1		3	
絵本の読み聞かせ方	読み聞かせ方	わかりやすい言葉に変えて読む	2	2	1	1		1	1	1	1			10	
		ゆっくり、はっきり読む	3					1						4	
		繰り返し読む	1							1				2	
	手段	感情や抑揚を込めて読む	4	3		6	4	8	2		2	1	2		32
		やり取りや確認をしながら読む	2	4	3	2	1	3	3	2				2	22
		文字を指差しながら読む				1									1
		あえてそのまま読む						1				2			3
		子供に読んでもらう					1					1	1		3
		手話を使う	3	3	2					1					9
		手話と指文字、身振子を使う								1	1				2
絵本を置く場所	身振子を使う			1						1	1		1	4	
	手の届く所に置く		1	1	1	3	1			1		1		9	
	目が留まる場所に置く		1	1	1		2			2			1	8	
	あらゆる場所に置く	1			1	1					1			5	
働きかけ	子供に合わせる	子供のペース	3	2		2		2	1		3	2		17	
		タイミング	1							1					2
	動機付け	意識づけ			1	4	4	2			1		2	1	16
		ほめる													0
親の姿勢											1	2		3	
			1	1	1		1						4		

数字は小カテゴリーの件数

カテゴリーの〔わかりやすい言葉に変えて読む〕では、聴覚障害幼児は、「全体群」（3歳児2件、4歳児2件、5歳児1件）、「部分群」（3歳児1件、4歳児1件、5歳児1件）であり、すべての年齢において、回答がみられた。

IV. 考察

1. 家庭での読書活動の特徴

読み聞かせ頻度においては、聴覚障害幼児は、「全体群」も「部分群」も、年齢の進行に伴い、低くなる傾向であることが示された。他方、健聴幼児は、「全体群」も「部分群」も年齢の進行に伴い、高くなる傾向であることが示され、聴覚障害幼児と健聴幼児では、年齢の進行に伴い、読み聞かせ頻度が異なることが示唆された。読み聞かせ時間においては、聴覚障害幼児は、「部分群」に比して、「全体群」の方が高い傾向であることが示された。他方、健聴幼児においては、「全体群」に比して、「部分群」の方が高い傾向であることが示され、聴覚障害幼児と健聴幼児では、絵本の内容に対する興味の違いによって異なることが示唆された。読み聞かせの頻度や読み聞かせ時間が、聴覚障害幼児に物語を読ませることへの困難さによるものなのか、あるいは親が、聴覚障害幼児に物語を読み聞かせることへの困難さによるものなのか、または、絵本のページ数や展開の違いによるものなのか、本研究では、明らかにできない。しかし、聴覚障害幼児においては、「全体群」、つまり興味の発達が進み、本全体として物語を読んでいる群では、読み聞かせ時間の中央値が高いことから、聴覚障害児が物語を読むことと、家庭での読み聞かせ時間との間には関連性が高いことが考えられた。今後は、家庭での読書活動が、幼児の絵本読みにどのような影響があるのか、検討する必要がある。

2. 絵本を読ませる目的

聴覚障害幼児も健聴幼児も、すべての対象において、『興味・関心』の回答が多いことが示された。聴覚障害幼児においては、「全体群」では、年齢の進行とともに、基本的には『興味・

関心』が中心で、それに『知識・理解』が加わることが考えられた。特別支援学校（聴覚障害）では、ことばの獲得や理解を促すために絵本などの視覚教材が用いられており（斎藤，2006）、家庭においても、興味・関心をもたせるとともに、知識習得のために絵本を活用していることが窺えた。今後は、家庭において、絵本をどのように活用しているのか、さらなる検討が必要である。

3. 絵本を読ませる際の工夫

大カテゴリーの件数の結果（Table 6）から、聴覚障害幼児も健聴幼児も、3、4歳児は、「全体群」も「部分群」も、『読み聞かせ方』の工夫をしていること、5歳児は、聴覚障害幼児では、『絵本の選び方』、健聴幼児では、『働きかけ』と異なる傾向にあることが示された。『読み聞かせ方』の詳細においては、小カテゴリーの件数の結果（Table 7）から、「全体群」では、聴覚障害幼児も健聴幼児も、すべての年齢に共通して、〔やり取りや確認をしながら読む〕の小カテゴリーが挙げられていた。先行研究（斎藤，2008）では、聴覚障害幼児の絵本を通したやり取りの不足が報告されている。本研究においては、「全体群」に含まれる聴覚障害幼児は、自由記述による回答であり、件数は多くないが、絵本の読み聞かせを通してやり取りが行われていることも、推測された。聴覚障害幼児では、「全体群」も、「部分群」もすべての年齢において、〔わかりやすい言葉に変えて読む〕の小カテゴリーが挙げられており、どのように読んでいるのか、検討する必要性が示唆された。

聴覚障害幼児においては、リテラシーの発達を促す方法として、親と子が絵本を通して相互活動を行う共同読み（shared reading）が提唱され、その効果が報告されている（Justice & Ezell, 2002）。本研究において、「全体群」に含まれる聴覚障害幼児は、家庭において、やり取りや確認をしながら、わかりやすい言葉に変えて読み聞かせをしており、今後は、どのような読み聞かせ方をしているのか、更なる検討が必要である。

V. まとめ

本研究では、聴覚障害幼児がよく読んでいる絵本の内容を分類し、絵本の内容の違いから、家庭での絵本読み活動、絵本を読ませる目的、工夫点について、健聴幼児との比較、年齢の違いを通して検討した。

家庭での絵本読み活動においては、読み聞かせ頻度においては、「全体群」も「部分群」も、年齢の進行に伴い、聴覚障害幼児は減り、健聴幼児は増える傾向であることが示唆された。読み聞かせ時間においては、聴覚障害幼児は「部分群」に比して、「全体群」の方が長く、健聴幼児は「全体群」に比して、「部分群」の方が短い傾向であることが示され、絵本の内容に対する興味の違いによって、異なる傾向であることが示唆された。絵本の内容に対する興味は、「1ページごと」から「絵本全体」へと、段階を経て発達することが明らかにされている(村石, 1959)。本研究においては、健聴幼児は、年齢の進行に伴い、絵本全体を読む「全体群」の割合が増えていくことが示され、段階を経て、絵本の内容に対する興味は発達していくことが推測された。加えて、読み聞かせ時間においては、健聴幼児は、「部分群」の方が「全体群」よりも中央値が高いことから、読み聞かせ時間の長さが、絵本の内容に対する興味の発達と関連しないことが推測された。他方、聴覚障害幼児は、絵本の内容に対する興味の発達は、年齢が進行しても、「全体群」の割合は、60%程度に留まっていること、「全体群」の方が「部分群」よりも読み聞かせ時間の中央値が高いことから、読み聞かせ時間が、絵本の内容に対する興味の発達と関連性があることが窺えた。聴覚障害幼児が、「絵本全体」を読むためには、絵本の読み聞かせが重要であることが推測された。

絵本を読ませる目的においては、聴覚障害幼児は、年齢の進行に伴い、絵本の楽しさに加え、絵本を通して知識や理解を促すために、家庭でも絵本を活用していることが推測され、今後は、家庭でどのように絵本を活用しているのか、その詳細について検討する必要がある。

絵本を読ませる際の工夫においては、聴覚障害幼児も健聴幼児も、3、4歳児は「全体群」も「部分群」も、『読み聞かせ方』の工夫をしているものの、5歳児は絵本の内容に対する興味によって、工夫点が異なる傾向にあることが示された。『読み聞かせ方』の詳細では、〔やり取りや確認をしながら読む〕は、聴覚障害幼児も健聴幼児も、「全体群」では、すべての年齢に共通して挙げられており、今後は、読み聞かせ方の検討の必要性が示唆された。

付記

本研究を行うにあたり、ご協力をいただきました特別支援学校(聴覚障害)・幼稚部の先生方と保護者の皆様に心より、お礼申し上げます。

文献

- 秋田喜代美・無藤隆(1992)小中学生の読書行動に家庭環境が及ぼす影響. 発達心理学研究, 3, 90-99.
- 秋田喜代美・無藤隆(1996)幼児の読み聞かせに対する母親の考え方や読書環境に関する行動の検討. 教育心理学研究, 44, 109-120.
- Aram, D., Most, t., & Mayafit, H. (2006) Contributions of mother-child storybook telling and joint writing to literacy development in kindergartners with hearing loss. *Language, Speech, and Hearing Services in Schools*, 37, 209-223.
- Bus, A. G., Van Ijzendoorn, M. H., & Pellegrini, A. D. (1995) Joint book reading makes for success in learning to read: A meta-analysis on intergenerational transmission of literacy. *Review of educational research*, 65, 1-21.
- 陳盈如・茂木成友・鄭仁豪(2013)特別支援学校(聴覚障害)幼稚部における絵本の活用に関する研究. 聴覚言語障害, 42, 31-41.
- 鄭仁豪(1996)聴覚障害児の読みのプロセスに関する実験的研究. 風間書房.
- 鄭仁豪(2004)聴覚障害児の文章理解の方略に関する研究-黙読時の眼球運動の分析による検討-. 平成13-15年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書(研究課題番号:13410031).
- Easterbrooks, S. R., & Stephenson, B. (2006) An examination of twenty literacy, science, and

- mathematics practices used to educate students who are deaf or hard of hearing. *American Annals of the Deaf*, 151, 385-397.
- 生田美秋 (2013) 絵本のテキスト. 生田美秋・石井光恵・藤本朝巳 (編) ベーシック絵本入門. ミネルヴァ書房.
- 今井靖親 (1991) 子どもの本・子どもと本. 福沢周亮 (編) 子どもと本の心理学. 大日本図書, 8-40.
- Justice, L., & Ezell, H. (2002) Use of Storybook Reading to Increase Print Awareness in At-Risk Children. *American Journal of Speech-Language Pathology*, 11, 17-29.
- Kaderavek, J., & Pakulski, L. (2007) Mother-child story book interaction: Literacy orientation of preschooler's with hearing impairment. *Journal of Early Child Literacy*, 7, 49-72.
- 国立青少年教育振興機構 (2013) 「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究」報告書.
- Lederberg, A., & Beal-Alvarez, A. (2011) Expressing: From prelinguistic communication to building vocabulary. In M. Marchark.M. & P.Spencer (Eds.), *The oxford handbook of deaf studies, language, and education, vol. 1, second edition*. New York: Oxford University Press.
- 四日市・鄭・澤 (2015) デフ・スタディーズろう者の研究・言語・教育: オックスフォード・ハンドブック. 明石書店.
- Mol, S. E., & Bus, A. G. (2011) To read or not to read : a meta-analysis of print exposure from infancy to early adulthood. *Psychological Bulletin*, 137, 267-296.
- 村石昭三 (1959) 幼稚園児のリテラシー. *読書科学*, 4, 24-31.
- 奈良女子大学文学部附属幼稚園幼年教育研究会編 (1986) 幼児は絵本をどうとらえるか. 絵本との出会い 3.4.5歳児の指導. ひかりのくに株式会社. 12-53.
- Ortiz, C., Stowe, R. M., & Arnold, D. H. (2001) Parental influence on child interest in shared picture book reading. *Early Childhood Research Quarterly*, 16, 263-281.
- Roberts, J., Jergens, J., & Burchinal, M. (2005) The role of home literacy practices in preschool children's language and emergent literacy skills. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 48, 345-359.
- 斎藤佐和 (2006) 聴覚障害児・者の教育. 奥野英子 (編) 聴覚障害児・者支援の基本と児実践. 中央法規, 64-69.
- 斎藤佐和 (2008) 聴覚: 聴覚障害に学ぶ世界. 小谷津孝明・小川俊樹・丹野義彦 (編) 臨床認知心理学. 東京大学出版会, 147-163.
- 坂本多朗 (1997) ぜひ読ませたい絵物語本・童話本の取り扱いと読ませるための工夫 (1). *聴覚障害* 52 (10), 36-46.
- 佐々木宏子 (1980) 絵本-児童心理学からの研究視点をさぐる-. 日本児童研究所 (編) 児童心理学の進歩-1980年版-. 金子書房, 309-355.
- Senechal, M., & LeFevre, J. A. (2014) Continuity and change in the home literacy environment as predictors of growth in vocabulary and reading. *Child Development*, 85, 1552-1568.
- Spencer, P., & Gutfreund, M. (1990) Characteristics of "Dialogues" between mothers and prelinguistic hearing-impaired and normally-hearing infants. *The Volta Review*, 92, 351-360.
- Spencer, P., & Marchark.M. (2010) Evidence-Based Practice in Educating Deaf and Hard-of-Hearing students. *Oxford university press*.
- 松下淑・坂本幸訳 (2017) 学力・リテラシーを伸ばすろう, 難聴児教育-エビデンスに基づいた教育実践-. 明石書店.
- Stobart, C., & Alant E. (2008) Home-Based Literacy Experiences of Severely to Profoundly Deaf Preschoolers and Their Hearing Parents. *Journal of Developmental and Physical Disabilities*, 20, 139-153.
- Swanwick, R., & Watson, L. (2007) Parents sharing books with young deaf children in spoken English and in BSL: The common and diverse features of different language settings. *Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, 12, 385-405.
- 立田慶裕 (2015) 就学前の読書教育-本に親しみ, 言葉を知る-. *読書教育の方法*. 学文社, 87-96.
- 上田紋佳・猪原敬介・塩谷京子・小山内秀和 (2017) 語彙力・文章理解力の発達に及ぼす読書のジャンルの影響. *読書科学*, 59, 121-133.
- 横山真貴子・上野由利子・木村公美・原田真智子 (2007) 4歳児の家庭における絵本体験の特徴-幼稚園での絵本体験の影響をふまえての分析-奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 16, 49-58.

— 2020.8.23 受稿、2021.1.13 受理 —

Characteristics of Picture Book Reading Activities at Home for Preschool Deaf Children: Analysis on the Different Interests in the Content of Picture Books

Satoe SAIGUSA* and Inho CHUNG**

This study examined picture book reading activities at home. The contents of the survey were reading activities of picture books at home, the purpose of reading picture books, and points to keep in mind when reading picture books. The participants in the study included 76 preschool deaf children and 91 preschool hearing children. The participants were divided into two groups: Whole book story group (WBSG) and Part book story group (PBSG). The results indicated as follows: (1) The WBSG of preschool deaf children had long reading times. In order for preschool deaf children to read the story, it was considered to be related to reading activities at home. (2) Preschool deaf children had the purpose of "knowledge/understanding" in addition to "interest/ concern." (3) The WBSG of preschool deaf children and preschool hearing children was reading a picture book while interacting with their parents. It is suggested that in future, it is necessary to study how preschool deaf children share the reading of picture books.

Key words: preschool deaf children, home reading activities, shared reading, picture book contents

* Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba

** Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba